

# 森鷗外「舞姫」試論

—— 相沢謙吉は真の親友ではない ——

張

軍\*

## On “Maihime” Written by Mori-Ogai

—— Aizawa-Kenkichi is not a true friend ——

Zhang JUN\*

### Abstract

“Maihime” is the virgin work of Mori Ogai. The author uses a romantic and elegant style to describe vividly the self-consciousness of the hero —— Oda-Toyotaro and the frustration in his internal world. About another character —— Aizawa-Kenkichi, the author doesn't talk so much, but he play an important role in the story. This essay is to illustrate this character —— Aizawa-Kenkichi in the writer's opinion.

**Key words:** friendship, betray, feebleness, flintiness, bureaucratic apparatus

### はじめに

周知のように鷗外の「舞姫」は、明治二十三年一月の「国民之友」（第六卷第六九号付録）誌上に発表されたものだ。それは鷗外のドイツみやげ三部作の代表作であり、文壇への処女作でもある。作品が発表されて以来今まであくまでも文学評論家の評論の焦点で、注目されている。人々はいろいろな角度、側面から「舞姫」をめぐってそれなりの観点、評価、批評などを出した。私もあえてこの作品に自分なりの考えを述べようとする。そこで、今回はその登場人物の一人即ち主人公太田豊太郎の親友——相沢謙吉に焦点を当てて自分なりの考察を試みてみたいと思うのである。

相沢謙吉は果たして太田豊太郎の真の親友であったか。その疑問は今でもまだ私の心の中に大きく残されている。

### 一. まず主人公の足とりを追うと

秀才の誉高い主人公太田豊太郎は、某省より「洋行して一課の事務を取り調べよとの命」を受けて「模糊たる功名の念と、検束に慣れたる勉強力」を持ってベルリンに着く。その大都の華麗な雰囲気を目を奪われる。しかし、持ち前の自制心と勉学への熱意によってそれに惑わされることはなかった。しかしながら三年ばかりたつうちに豊太郎は過去の自分の生き方に疑問を覚えるようになった。「余は父の遺言を守り、母の教に従ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びし時より、官長の善き働き手を得たりと奨ますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、ただ所動的、機械的人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当たりたればにや、心の中なにとなく妥ならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり」と自覚する。いわゆる近代自我の覚醒である。それは

---

平成 14 年 12 月 26 日受理

\* 瀋陽工業大学外国語学部・講師

近代都市ベルリンの大学という自由なムードの内に醸成され、日本の官僚機構と封建的な束縛から切り離されたこの異郷において初めて可能になったものであった。彼は今までの自分は真の自己を喪失して他に活用されてばかりいる人間だったということを意識し始めた。たとえば、「活きたる辞典」「生きたる法律」などにならなくてはならないことへの重圧など。しかし、彼の内部には独立した思想がだんだん形成されていったのである。したがって、官長と豊太郎との関係も次第に変化し、自らの意見をはばかることなく出張するようになったのを憎まれるようにさえなったのである。また「かたくななる心と慾を制する力」で留学生たちと遊興せず、優等生ぶっているとの反感を買い、そのためにかえって嘲笑と誹謗の対象となってしまうこともあった。そしてこんな時に、寺門の扉よりかかって泣いている少女エリスにあったのである。かくてよく知られているように逆境の身をはかなむエリスを助けてから、太田と彼女との淡い交情が始まる。最初は子供っぽい無邪気な恋の喜びにふけっていた二人であったが、「事を好む人」の中傷によって免官されてしまう。母の死の悲報を受けたのもちょうどその頃であった。ドイツに残るかの返答を公使に約束した日も近づいた。このような苦境にあった時に、相沢謙吉という人物が初めて登場した。

## 二. 相沢謙吉はどんな人であろうか

彼は東京の天方伯の秘書官である。天方伯はある程度の大官僚である。友人としての相沢謙吉は豊太郎が免官になったことを官報で知り、ある新聞社の編輯長を説いて豊太郎が新聞社の通信員としてベルリンに留まり、政治、学芸などのことを報道する仕事に就けるように骨を折ってくれた。これは困境に陥っていった豊太郎にとってなんとと言ってもすごい助けであった。もし、友情とは友たちが苦境に立たされたときに何か救いの手を伸べるものとしたら、

このときの相沢は確かに良友に違いない。しかし、これはこの後に発生する豊太郎を義理と人情の葛藤に追い込むというひどい仕打ちがこれまた彼によって為されるのはなんとも皮肉なことである。

我が学問は荒みぬ、屋根裏の一灯かすかに燃えてエリスが劇場より帰りて、椅子に寄りて縫ひ物などするそばの机にて、余は新聞の原稿を書けり――

我が学問は荒みぬ、されど余は別に一種の見識を長じき。

ここには貧しいながらも豊太郎が一心にエリスと一緒に生活しようとするひたむきさがうかがえる。主人公太田豊太郎にとって、官を離れ民間に身をおいて新聞などの仕事に携わるということは決して悪いことではなく、むしろ生々しい、本来的な人間にたち帰るということであろう。つまり、このときの豊太郎には名誉を挽回するとか帰国するとかいう観念は薄れていたようにさえ思われる。しかし、やがて届いた良友の相沢謙吉からの手紙はこの束の間の幸福を打破することになる。

とみの事にてあらかじめ知らするに由なかりしが、昨夜ここに着せられし天方大臣に付き我も来たり、伯のなんぢを見まほしとのたまふに、疾く来よ。なんぢが名誉を回復するもこの時にあるべきぞ。心のみ急がれて用事をのみ言ひやる、となり。

豊太郎はこの相沢の手紙に内心強く動かされ、次第に元の失った世界へと引き戻されていくのである。何年かぶりの対面を前に緊張する豊太郎。そこでなされた対談は次のようなものであった。

余は少し踟躕したり。同じく大学に在りし日に、余が品行の方正なるを激賞したる相沢が、けふはいかなる面もちして出迎ふらん。室に入りて相對して見れば、形こそ旧に比ぶれば肥えて逞しくなりたれ、依然たる快活の氣象、我失行をもさまで意に介せざりきと見ゆ。別後の情けを細叙するにも違あらず、引かれ

て大臣に謁し、委託せられしは独逸語にて記せる文書の急を要するを翻訳せよとの事なり。余は文書を受領して大臣の室を出でし時、相沢は跡より来て世と午餐を共にせんといひぬ。食卓にては彼は多く問ひて、我多く答へき。彼が生路はおほむね平滑なりしに、輾轉数奇なるは我身の上なりければなり。余が胸臆を開いて物語りし不幸なる閱歴を聞きて、かれはしばしば驚きしが、なかなか余を誹めんとはせず、かへりて他の凡庸なる諸生輩を罵りき。されど物語の畢りしとき、彼は色を正して諫むるやう、この一段のことは素と生まれながらなる弱き心より出でしなれば、今更に言わんも甲斐なし。とはいへ、学識あり、才能あるものがいつまでか一少女の情にかかづらひて、目的なき生活をなすべき。今は天方伯も唯独逸語を利用せん心ののみなり。おのれもまた伯が当時の免官の理由を知れるが故に、強てその成心を動かさんとはせず、伯が心中にて曲庇者なりなんと思はれんは、朋友に利なく、おのれに損あればなり。人を薦むるはまづその能を示すに若かず。これを示して伯の信用を求めよ。またかの少女との関係は、よしや彼に誠ありとも、よしや情交は深くなりぬとも、人材を知りてのこひにあらず、慣習といふ一種の惰性より生じたる交なり。意を決して断てと。これその言のおほむねなりき。

豊太郎の「不幸なる閱歴」を聞いて真の親友ならば、遠慮なく豊太郎にどこが正しくて、どこが間違いかを知らせるはずだが、相沢は豊太郎を庇い、かえって豊太郎を陥れた同郷人達を罵ってみせる。これは相沢の腕のうまいところではないかと思う。先に豊太郎を喜ばせておいてから自分こそが真に豊太郎を理解できる唯一の味方であることを豊太郎に示している。これは相沢が豊太郎に最後の結論「意を決して断て」を通告するための布石である。ここには相沢の官僚としての強さがよく出ているではないか。これを通して考えると、相沢はかつて豊太郎が

免官になった直後、彼にまず通信員の仕事をさせ、折を見て汚名の挽回をさせようと図ったのではないかと思うようになった。確かに相沢謙吉は『舞姫』の中では一人の仕掛け人という役を演じている。すごい人間だ。権謀術策の徒とも言うべきだ。「学識あり、才能あるものが、いつまでか一少女の情にかかづらひて、目的なき生活をなすべき」、相沢の言う目的とは国家有為の人物になることである。相沢は功利立身出世主義を至上のものとしており、これも、そこからの発想である。路傍の花のような取るに足りない少女への情に引きずられて、国家有為の人物になることを忘れるなという警告である。このように相沢は功利的に物事を割り切り合理化しようとする。豊太郎は出身出世のためにベルリンに来たのだが、前に述べたようにその観念は既にこの頃には薄れていた、しかし、相沢は再びその観念を掻き立てようとしているのである。

もし彼が真の親友だったら、友達を助けるためには、自分が損をしてもかまわないと言う情け心があつたはずである。「おのれもまた伯が当時の免官の理由を知れるが故に、強てその成心を動かさんとはせず、伯が心中にて曲庇者なりなんと思われんは、朋友に利なく、おのれに損あればなり」という言葉に相沢の功利的な考え方がはっきり出ている。例の豊太郎宛の手紙にも天方伯が豊太郎をどう評価するかを推薦者として気にかけている様子が表出されている。表面的には相沢は寛大で明るい人物のようだが、裏には一物ありという人間であるとは否めない。

### 三. 友情を裏切る行動

相沢は豊太郎にエリスを捨てて名誉を挽回する機会を与えた。また、豊田太郎の困窮していたときに金銭的な援助もしたから、豊太郎の目には彼が「大洋に舵を失ひし舟人がはるかなる山を望むごとき」存在としては映った。その結

果「弱き心」のせいで、相沢の要求を拒否することができなくなった。これは真の親友のやり方であろうか。天方伯は豊太郎の語学の才能を認めて彼に豊太郎を紹介した相沢の信用も増したはずであるが、それは相沢の思惑通りに進んでいる。

豊太郎は華麗なるロシア宮廷で通訳として活躍しながらもエリスのことは脳裏を去らなかつた、つまりエリスとの関係を断てなかつた。この苦しみを相沢は知っていたかもしれないが、彼は完全にそれを無視した。

一月ばかり過ぎて、ある日伯は突然われに向ひて、「余は明旦、露西亜に向ひて出発すべし。随ひて来べきか、」と問ふ。余は数日間、かの公務に違なき相沢を見ざりしかば、この間は不意に余を驚かしつ。「いかで命に従はざらむ。」余は我恥を表はさん。この答はいち早く決断して言ひしにあらず。余はおのれが信じて頼む心を生じたる人に、卒然ものを問はれたるときは、咄嗟の間、その答の範囲を善くも量らず、直ちにうべなふことあり。さてうべなひし上にて、その為し難きに心づきても、強て当時の心虚なりしを覆ひ隠し、耐忍してこれを実行することしばしばなり。——。二三日の間は大臣をも、たびの疲れやおはさんとしてあへて訪らはず、家にのみ籠りをりしが、ある日の夕暮使して招かれぬ。往きて見れば待遇殊にめでたく、露西亜行の労を問ひ慰めて後、われと共に東にかへる心なきか、君が学問こそわが測り知るところならね、語学のみにて世の用には足りなむ、滞留のあまりに久しければ、様々の係累もやあらんと、相沢に問ひしに、さることなしと聞きて落居たりと宣ふ。その気色辞むべくもあらず。あなやと思ひしが、さすがに相沢の言を偽なりともいひ難きに、もしこの手にしも縋らずば、本国をも失ひ、名誉を挽きかへさん道をも絶ち、身はこの広漠たる欧州大都の人の海に葬られんかと思ふ念、心頭を衝いて起れり。ああ、何

らの特操なき心ぞ、「承はり侍り」と応へたるは。

以上にも明らかなように天方伯に帰国を進められる場面と天方伯にロシアについて来るかと誘われる場面との小説構造は同じである。両場面とも相沢は直接に登場しないが、後の場面では間接的ながら重要な役割を果たしている。相沢が天方伯に豊太郎とエリスの仲はすべて切れていると報告していたことが、天方伯が豊太郎に帰国を進める理由になっているからである。相沢は二人の関係は切れていないということを知りながら天方伯には切れたと報告している。これは何といつても友達を裏切るやり方ではないか。これによって豊太郎はもはや天方伯の勧めを拒否できない窮地に追い込まれるのである。これは真の良友のやり方であるか、これも相沢が自分の意志で豊太郎を自分の世界に引き戻そうとする重要な一歩なのである。

天方伯は相沢の言葉を信じて、今や自分の目で確かめた豊太郎の人物及びその才能を信頼している。天方伯の信頼と厚意を前に、また、自分の失った世界を戻すという意識が蘇られて、「弱きころ」の持ち主——豊太郎はもう身動きも出来ない状態となる。

黒がねの額はありとも、帰てエリスに何とか言はん。「ホテル」を出でしときの我心の錯乱は、譬へんにものなかりき。余は道の東西をも分かず、思に沈みて行くほどに、往きあふ馬車の馭丁に幾度か叱せられ、驚きて飛びのきつ。

豊太郎は帰宅すると同時に意識を失い昏睡の状態のまま数週が経過した。もし相沢が真の親友であつたら、豊太郎がこのような昏睡状態に陥っている間にわざわざエリスに豊太郎は彼女との縁を切り、帰国することになったなどと告げられたらどうか。その結果、豊太郎はエリスから裏切りを罵倒される結果になった。相沢はエリスを精神的に殺したといえよう。

なぜ、相沢謙吉は友情を裏切ることを惜しま

ないで豊太郎を官僚世界に引き戻そうとするか。

相沢という人間はある意味においては日本官僚機構の番犬だといってもいいと思う。なぜかというと、相沢謙吉の太田豊太郎とエリス恋愛に対して取った態度及び行動はすべて官僚機構の利益を守るための物としか受け取れないからである。近代国家の体制下およびその機構下において働く人間すなわち官僚などに対しては、有機な人間性より無機な器械的な器械性が当然要求される。国家という全的器械にとって、なによりも器械を動かす歯車の部分部分が必要とされるのであって自由意志を持つ人間は、体制という器械をばぶち壊してしまう危険性すらあるゆえに、いち早く排除されてしまうのだ、そのため、豊太郎の自我の覚醒が官僚機構の要求と反対の方向へ向かっていくので、挫折にあったわけだと思われる。だが、豊太郎は国家のエリートとしてベルリンに行ったのだから、その才能はある程度で官僚機構に認められると言える。官僚機構が彼を国家の有用の人材に養うために苦心さんたんした。このような人材を失ったら、官僚機構にとってなんといっても損失である。従って、豊太郎を官僚の世界に引き戻して国のためにその才能を利用するためである。相沢謙吉は豊太郎の信頼する友人としてよく豊太郎の性格（弱き心）分かるから、友情を利用して彼を引き戻す役割をうまく果たせる。

### おわりに

さて、この論のテーマとなる、相沢謙吉は果たして太田豊太郎の真の親友であったか、脇役人物としてこの小説の中どういう役割をしているか、つまり森鷗外はなぜこの人物を描き出すかについて自分なりの結論を出さなくてはならないところまで来たが、この『舞姫』の最後の部分

ああ、相沢謙吉がごとき良友は世にまた得が

たかるべし。されど我脳裏に一点の彼を憎む  
ところ今日までも残れりけり。

を見る限り、全面的に否とは言えぬまでも五分五分のところのように受け止められる。確かに相沢は「弱き心」の持ち主——豊太郎をよく補佐し、暖かい友情を示しているといえるであろう。だから、結果的にはエリスを「精神的に殺し」てしまう原因を作ったのにもかかわらず、彼がいわゆる「悪人」ではないことは明らかである。

この二人を極端に分ければ強と弱という関係になるであろうか。別な言い方をすれば、豊太郎は恋愛を契機とする人間内面の自由や美へのロマン的コースを歩みたがる人間であり、相沢は、政治的権力に依存して、外的行動に活路を求めるリアルなコースを歩みたがる人間ということになるかもしれない。その強と弱が互いに補い合う場合には全く問題が起こらないが、いったん分裂が生じた場合は、強が弱を押しつぶすというのは当然な現象であろう。相沢謙吉という登場人物が小説の主人公豊太郎の性格を表現するには大きな働きをしている。作家はこの脇役の人物を利用してさらに主人公の「弱き心」及び他律的で受動的な性格をうまく浮き上がらせる。生き生きと主人公の心の動きと動揺の過程を描き出した。

作者森鷗外は近代作家として、主人公豊太郎を通しての近代自我の覚醒もしくは近代意識の芽生えを表現しようとするが、自分の認識の局限によって近代自我の覚醒の仕方やあり方を中途半端の近代的人間像を描いたのみで鷗外の筆が留まってしまったのである。言い換えれば、作者はその当時の社会体制に反抗しようとも自律的に反抗する力を持っていない。だから、相沢謙吉という人物を利用して作者の無力感を隠すのではないかと思う。特に、「舞姫」の末尾で、発した声は暗い詠嘆であり、人間喪失の沈痛な叫びである。さらにこの一言はまた、案外作者鷗外の心奥から発せられた真実の響きであった

かもしれない。

また、周知のように、この小説は自伝的な色彩が濃くて作者自分自身のことをモデルにして書いたのであるから、相沢謙吉という人物を描き出して自分のエリスを捨てる行為を自分の説のつじつまを合わせる理屈を設けるのではないかと思う。

エリスと豊太郎の恋愛に満ち溢れるこの情感が、当時の文壇に新鮮な息吹を与え、今日もこの作品の愛好される一つの理由となっていることを思えば、やはり相沢謙吉はこの作品の中の大きな脇役ということになるであろう。

## 謝 辞

本稿に執筆にあたっては、八戸工業大学総合教育センターの竹園洋子教授、渡辺武秀助教授、山本忠助教授、川守田礼子講師のご指導を頂いた。ここに記して心より感謝を申し上げる。

\*注：本稿では引用した原文としては「ちくま日本文学全集」（筑摩書房 2000年12月）に収録されている『森鷗外』の中の「舞姫」の内容を使った。

## 参考文献

- 『現代日本文学』—新研究資料—第一巻 小説Ⅰ・劇曲  
明治書院 2000年3月 初版発行  
長谷川 泉 『森鷗外論考』（増補） 明治書院 1972  
年1月 増補再版  
稲垣 達郎 『森鷗外必携』 学燈社 1969年10月